

なみ 柳引く 元1388^年

77ウ 小林526^年 和紀下388^年

3739^年 105^年

1丈=4.9km 紀下388^年
10丈=50km

(南) 482^年

3,750^年

「大和國」と記さないこと。

672年
紀下382^年 2^年

(六七二)

天武紀元年六月条には、大海人皇子の一行が、にわか吉野を突つて東国へ向かわれた時の状況が語られている。

そこに「こういう記載がある。」

「横河に乃らむとするに、黒雲有り。云々」

十余丈にして天に經水り」

なお通常、横河は、現在の名張川のことであらうと考えられている。

名張川は、伊賀・西比野を流れて北流する

しかし、この物語では、

(1) 横河は「中国の「黄河」に対応する「白」

川の上流域」現在の「黒川」を指す

(2) 大海人皇子等は、黒川が白川に注ぎ込む合流点あたり(阿蘇盆地への出入口あたり)に至られた

と仮定したい。

恐らく

阿蘇の中岳が吐き出す黒雲のような黒煙りは

幅十余丈ばかりもあって西の方向に柳引き

頭上の天空を二分しているように見えた

というところなのであろうと推察される。

また「玄黄は黒と黄の地の色」としてある

紀下388 8所
④4816
⑤4819

タイル

紀下421

紀下428

紀下431

3,751

・詳くは、第八十五章「黒雲有り。広さ十
余丈に、て天に經れり」の項において述べた

天武紀四年十一月是の月条に

夏の月に、大きに地震る

とある。

天武紀六年六月十四日条に、

大きに震動る

とある。

天武紀七年十月一日条には、

記されてい

物有りて綿の如くに、難攻に零れり

長さ五六尺ばかり、廣さ七八寸ばかり。則ち
風に隨ひて松林と葦原とに飄る。時人の曰は

甘露なり

と記されてい

と記されてい

へ火山から噴出した流動性の熔岩滴が、

大カンワ 1366 吳ニ

大カンワ 1361 吳ニ

HIL

時人の口はく以下
の文言は下前文と全く無関係なのはなかつたか

付へ放射能封じ、火山ガラスで研究 参考

という。朝日新聞 昭和十三年六月九日

概略の年代を推定することから出来る

えり、変質層の厚さを計測することによって、

であり、火山ガラスの表面の白く浮き出て見

また火山ガラスの変質は、千年にハミ程度

のものには、噴出したマグマ（溶岩）が急速

に冷える時に形成される。そして、噴火で生

火山ガラス（火山毛）に限らず、ガラス質

と説明されている。（「応祥苑」へ火山毛

岩層がガラス質の毛髪状をなすものという

と説明されている。（「応祥苑」へ火山毛

（1）なお、火山毛は、火山から噴出した流動性の熔

たり、降った

ということなのかも知れない。

難波に地理的に相当する所

タクマガ原

ラス質の毛髪状をなす火山毛

火山毛

火山毛

③3754¹/₂ から

3,753¹/₅

三代実録(前編)143¹/₅ 紀下431¹/₅
「火の国」225¹/₅ 錦のごとくにて、新波に
③3770¹/₅ みる

次頁
から

※参考迄に述べると、日三代実録の清和天皇の
貞観六年(八六四)十二月二十六日条に
次のような記述がある。
それは、天武紀七年十月一日条と丁度同じ
十月のことであつたという。(以下、聖真図
版668
669
670
第456回参照)

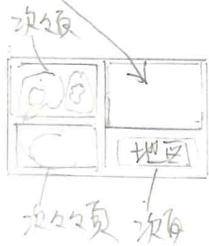
3,753⁺ - 2/5

・カラー

・右頁上半分

・限定杯
はみ出し
大きく掲載
下さい。

・出来るだけ
明るくお願い
します。



大 草千野(ほうそう)

ふんえん

なかだけ たかだけ しょうじょう

ねこだけ のぞ

半字アキ

写真図版 668 草千野上空から、噴煙をあげる中岳・高岳・頂上がギザギザにしている根子岳を望む

(旧火口)

『山溪カラー名鑑』日本の山 山と溪谷社、1984年11月15日(5刷)発行、584～7頁参照

374

374⁺

熊本 阿蘇の山河(天と地の神) 6/15

3,753 P- 3/5

類図 991-2/5

・右頁下半分

・大きく掲載
して下さい。

・トレスお願いします。

・全てコナ。

こめがき 米塚 (杵島岳の寄生火山)
▲ 954

きしま 杵島岳
▲ 1321

ささせり 草千里
(旧火口)

えぼし 烏帽子岳
▲ 1337

さんぼう 山上神社
ケーブルカー

砂千里浜

なか 中岳 ▲ 1510
たか 高岳 ▲ 1592

ねこ 根子岳 (猫岳)
▲ 1408

0 1,000 2,000 3,000 4,000m

北

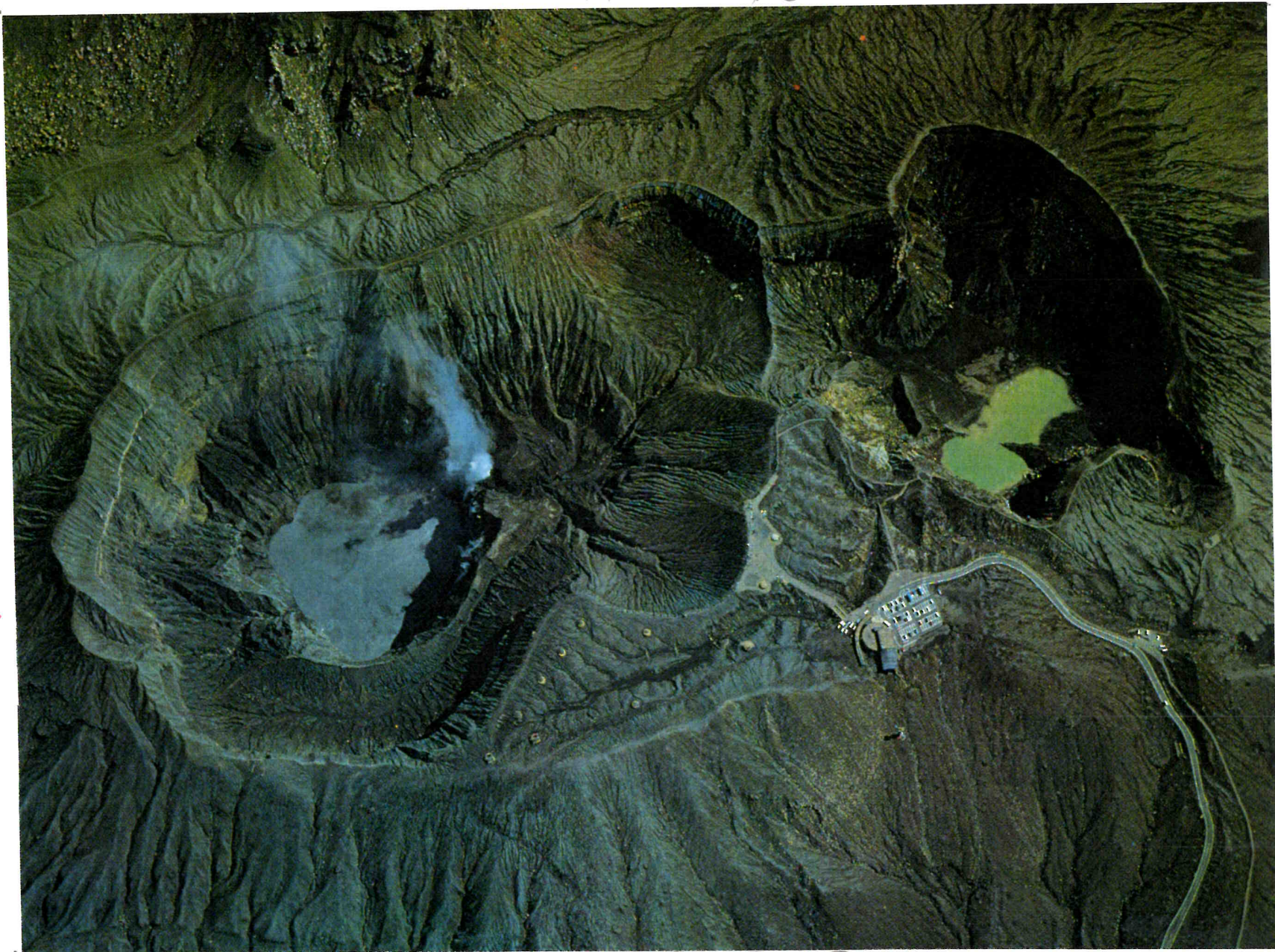
第456図 阿蘇の五岳 (杵島岳・烏帽子岳・中岳・高岳・根子岳)

『阿蘇山』国土地理院 昭和42年3月30日発行参照

376 P 五岳

3,753^p 4/5

- ・カラー
- ・左頁の
上半分に
大きく掲載
下さい。
- ・上下を、
間違え
ないで下さい。
- ・暗くならない
ように、
明るく
お願いです。



半全アキ

写真図版 669 ^{あそなかだけ}阿蘇中岳 ^{ふいかこう}の噴火口

『山溪カラー名鑑』日本の山 山と溪谷社、1984年11月15日(5刷)発行、585頁参照、^{376^p}

3,753^P - 5/5

- ・カウー
- ・左頁の下半分、
はみ出して大きく
掲載下さい。
- ・上下を間違えないで
下さい。
- ・明るく願ひます。



写真図版 670 阿蘇中岳火口の神霊池

- 『阿蘇神社』神社紀行(17)学習研究社、2003年3月13日発行、2~3、6~7、20、22頁参照。
- ・噴火口の底で増減する神秘的な火口湖は、『神霊池』と呼ばれ、その異変は^{大事件}を通じて都に報告された。
 - ・阿蘇神社では、噴火口の3つの「御池」(北の御池・中の御池・南の御池)を、御神体としている。377^P

15.2.18 (休) 下

紀下432

火の国225に記

3,754-1/2

尺の国 225 176P

浸 239

「火の国」225

言す紀下348 2行

三ノ宮 1116

前頁 143

大宰府言す。肥後国阿蘇郡正二位勲五等
健甕龍命の神靈池。去る十月三日の夜、
りて震ひ動く。池の水、空中に沸騰し、東南
に洒落す。其の東方に落ちるもの、布の如く
延緩へゆるやかにながみくし、広さ十許町
水の色は將水の如し。草木に粘着へねばり、
く消解せず。また比売神の領、元来、三石の
神あり。高き四許丈。同夜、二の石神顔崩す。
同、亀座に決いていふ。水疫の災有るべしと
とある。 (「火の国」井上辰雄、学生社二二
五頁参照) 天武紀七年十二月是の月条には、
地震が起つたことについて、次のように記さ
れてゐる。
筑紫國、大きに地震る。地裂くること廣
さ二丈、長さ三千餘丈。百姓の舍屋、村毎に
多く什小壞れたり。是の時に、百姓の一家、
岡の上に有り。地動る時に當りて、岡崩れて
處遷小り。然れども家既に全くして、破壊さ

「小町」94P 1112
昭和七年(八四〇)四月二十一日、從四位下勳五等建甕龍命に
從四位上が授けられた。

3732P 378

正 紀F441^P 山鳴り 紀F398^P 3754^P-2/2 紀F440^P 紀F438^P 紀F438^P

ここ

ある。

天武紀九年六月八日条に、「灰零れり」と
の方から解えてきた
という意味なのであろう
鼓の音に似た阿蘇山噴火の際の山鳴りが「東

天武朝になつても大倭国(肥後国)の古京にあ
たりには天変地異を観測する為の施設が残さ
れていて、逐一都に報告させていたのかも
知れない。
大和国の

天武紀九年二月十八日条に、
鼓の音の如くして、東方に聞ゆ
とある。

天武紀八年十一月十四日条に、「地震る」と
ある。

天武紀八年十月十一日条に、「地震る」と
ある。
こことを知らず。但し會明の後に、知りて大き
に驚くし
ることに無一。家の人、園の崩れて家の跡

大和 2400
フル
2864-1/2
15分

カラー
・1頁に、
大玉と楊枝
1た11。

3,755^r-2/2



1309 1409
写真図版 671 阿蘇中岳のストロボリ式噴火 (1993年)

かみ 神のすむ郷 阿蘇のものかたり展 熊本県文化財保護協会 2006年1月24日発行
64頁参照

ストロボリ式噴火 溶岩を周期的に噴出する比較的新しい噴火

RF450^P 12斤

あ
3
o

3763-2/3 19 眞の島地

火山 402 前 10 分 台時

3,757P

「かし」の頁 8 行 紀下 454P

一筆星の数十倍 (日本) の古記録に「太白昼見ゆ」とあるとあり、最大光度が一筆星の数十倍に達する場合は「太白昼見ゆ」(金星) 参照

東から西へ運行する場合もある (「公孫龍」金星) 参照

を失ない、やがて太陽の強烈な光に圧倒されて見えなくなってしまうのである。

ともあれ金星が東から西へ天を横切することは無い。

とすれば、短時間のうちに「昏時に、大星、東より西に度る」という記事の真意意味は何なのだろうか。

①「大星」とは、流れ星(流星)かも知れない。

②「かし、この記事もまた、東の阿蘇山の噴火についで述べているようにも思われる。

・昏時(中国の陰暦で戌時)現在の午後八時ごろ、東方の阿蘇山から噴き上がり、

げられた火山礫が、明るく大きく輝きながら、あたかも大星のように、東から古都の上空を飛び越え、西の方へ、天をよぎった。

ということも、まぎらわしく記述しているのではあるまいか。

そして、この年(天武十一年)の八月中には、阿蘇の噴火を思わせる記事が、以下に記

のように頻出する。

天武十一年八月五日条に「造法令殿の内に大きな虹有り」と記されている。

「だが、虹が出たくらいのもので、日本書紀に書き留めたとは考えにくい。

「たかうが」改題 3 行

23940:

3,759P-1/4

「こころ」③3777P

火山砂 ④402P ひろめく④1903

前回 89 次頁から
前頁へ

すなわちこの時、火柱は、異常なほど高く
と噴き上がり、噴きつづける風にあおら
灌頂幡が巖かにひらめいているの
見えた、と解される。(写真 672 673 674 参照)
国毎に皆見るこゝが出来た
噴き上げられ、風に流され、北の方へ漂っていった火
山砂(溶岩の破片)は、阿蘇山の北方(越海と
もいえる)筑紫国の宇美へ、あるいは(越海に
相当する)玄海灘へと落ちていったのであろう。
ところで、日本書紀は、いたるところにおいて、
時の順序を逆に記述しているように見受けられる。
恐らく、是の日の昼間に見えたものの、東の阿蘇山
か、大量の白い水蒸気を噴き出している様子だ
ったのであろう。
尚、大和国の都から見て東の山に白気が起
こた、という解釈をすれば、何の事だかさ
はり理解できない。わけであるが、しかし大和
国に相当する肥後国での出来事なのだろうと置き換
えて考えるとき、東の山に白気が
起った、といえは瞬間的に、
へ阿蘇山が白く水蒸気を噴き上げたに相違ない。
と、容易に納得される。

・カラー

・右頁の右端。

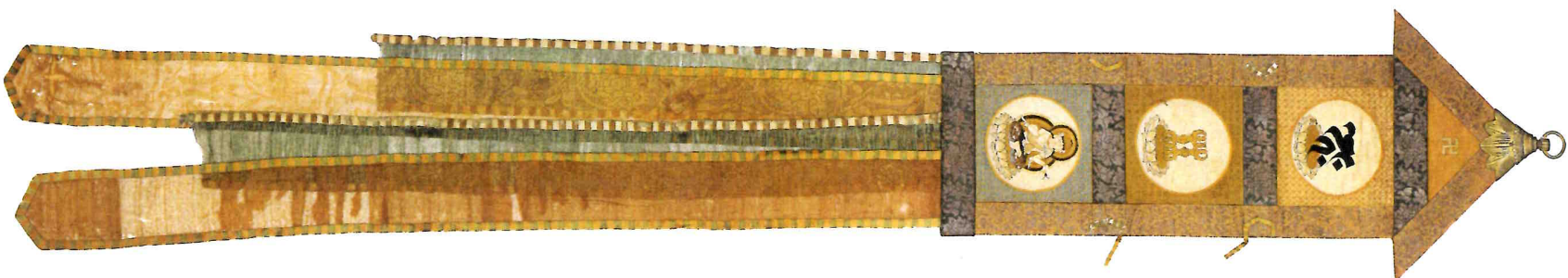
上、下段にゆたえ。

細長く掲載下さい。

・上下を大きくはみだして

下さい。

3,759^P 2/4



1404

写真図版 672

刺繍三味線印箱 重文

1204

14世紀初め 絹製 刺繍 17歳のうち 幡身：長55.0cm 幅33.5cm 奈良国立博物館

1304

『日本美術全集』第8巻

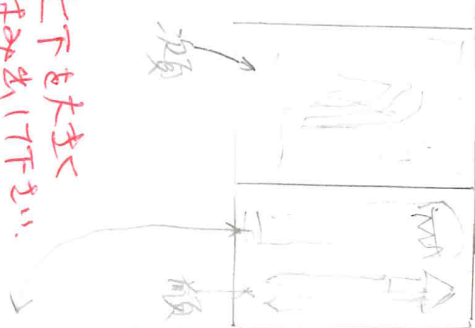
小学館 2015年6月30日発行

No.176 290頁参照

・カウー

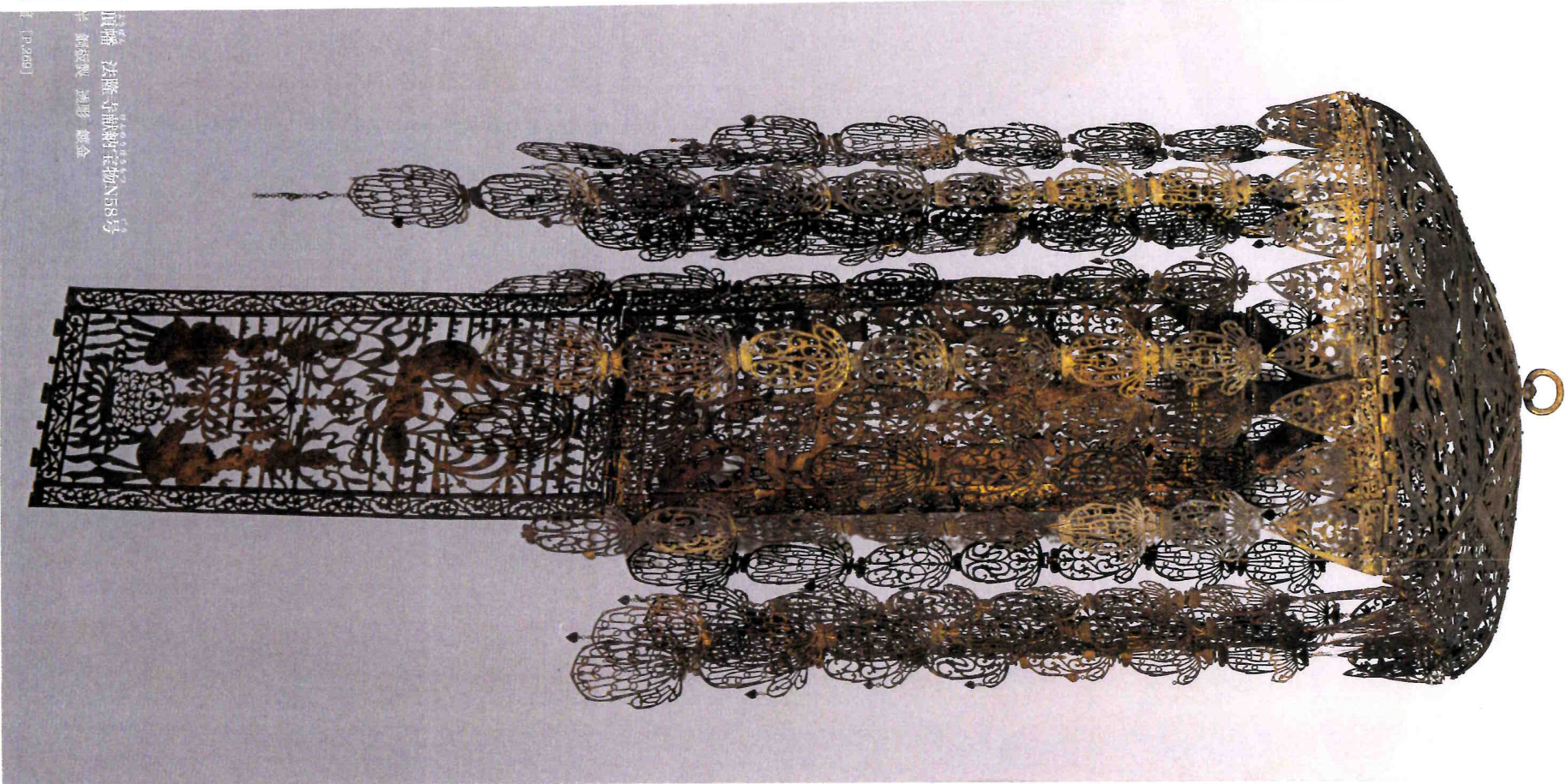
・右奥の上下段に
わたって、細長く
掘削下さい。

・左上下を大きく
はみ出し下さい。



3,759^p-3/4

ト
ル
文
字
を
入
れ



164

387

1369

1409

写真版

673

金銅灌頂幡

法隆寺南内宝物 N58号 (全長510cm)

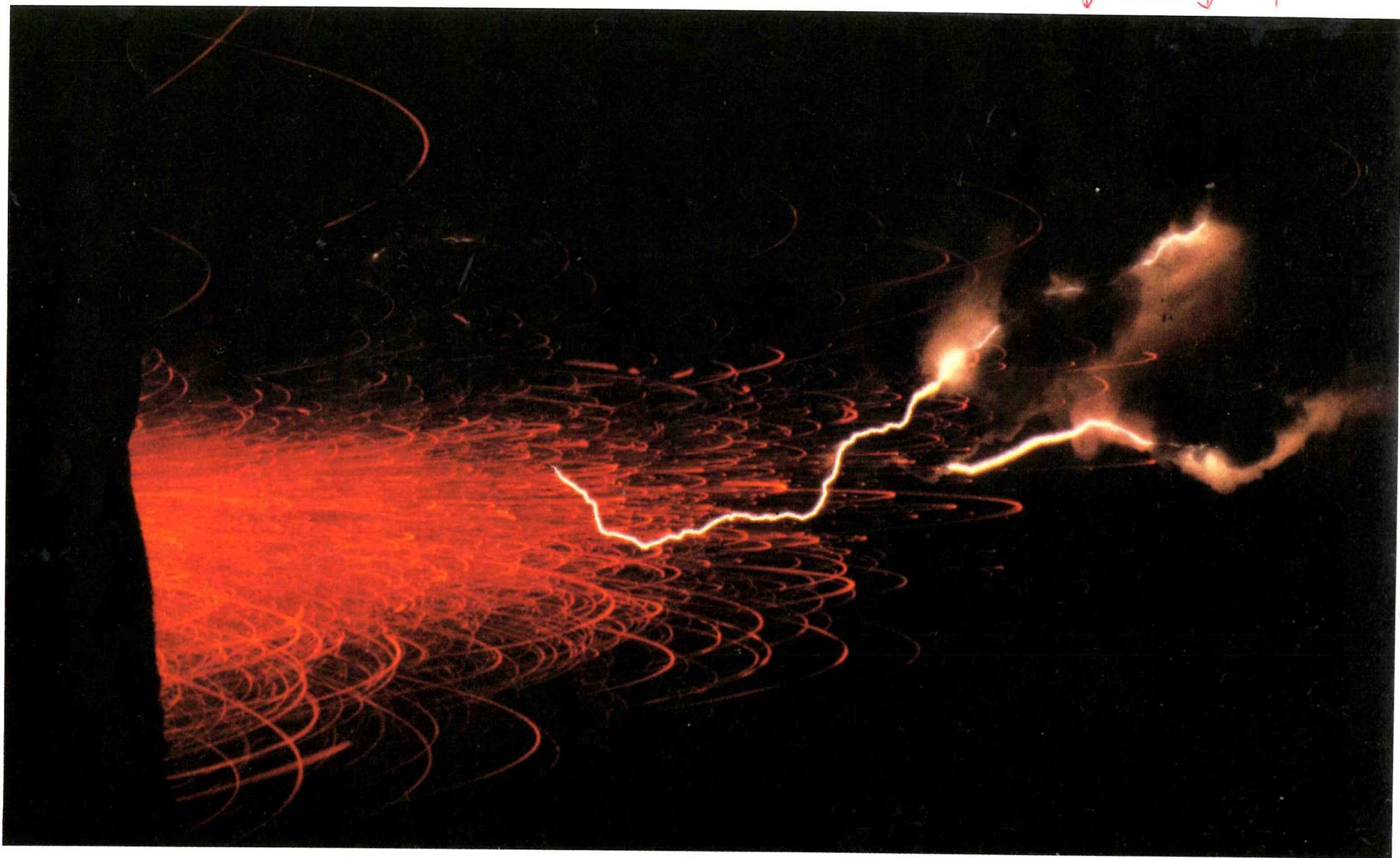
『日本美術全集』(2) 法隆寺と奈良の寺院 小学館 2012年12月10日発行 No.164 269頁参照

$$= \pi \text{ at } \xi \in \Gamma \cap \partial \Omega.$$

3759^P - 4/4

14a

但真田坂 674 阿蘇山の噴火と火山雷 (中岳火口、1979年)
1309
5 阿蘇神社 阿蘇神社紀行 (17) 学習研究社、2003年3月13日発行、32頁参照。



↑
回
上

Handwritten signature: 李金

388

紀下454⁶⁴ 3758⁶⁴ S63.1.9(4) 6 『小野小町』の章 「不明の一語につきる」 3,760^P-1/2 151 1121 多くの所 紀下454⁶⁴ 紀下457⁶⁴ 出鱈目 1527⁶⁴

まるで出鱈目・支離滅裂・無意味に感じら
 れるように見える。『日本書紀』の文章のほしは
 けにも『―――』更に並々ならない筆者達の心
 血が注がれているように思われる。さうした
 へいや下このような謎めいて見える記述
 こそが、日本書紀全体の虚構を掩蔽するのに
 必要不可欠のものである。✓
 と考えられ、偽装（いわけ）するカムフラージュ
 として、諸般に鑲められているのであろう、
 と推察される。
 本当に下金く意味の無い事だ。国史である
 日本書紀の文中に記されている筈などあ
 るまい。
 どのような言葉にも、一語一語に、それな
 りの大きな役割りがあるように解される。
 天武紀十一年（六八二）八月十二日条に、
 「大きに地動る」とある。
 前日（八月十一日）の噴火の継続なのだろ
 う。

ハイツ 大町 127°
 平日 よあけ あさかた

3,760^P - 7/2

次頁
 から

(参考: 掲載不要)

年月日 17(2005) / 29 (土)

30日 50
 31日 30
 1日 30
 2日 30
 3日 30
 4日 30

週間予報 (数字は降水確率%)

きよの天気

晴れ。波0.5m、のち1m。北西の風強く。

降水確率
 6時~ 12時~ 18時~
 0 0 30

H17.1.30(日)
 30日(日)旧暦12月21日



月	19.6
日	8.58
出	17.25
入	21.55
月	9.31

大阪港標準 中潮

満潮	10.07	干潮	3.40
	21.55		18.09

□ のち
 □ 一時・時々

天武紀11年(682)2月17日条

意訳。午前四時頃にあたる(参照)

岩波書店 四五四頁 注十一ハトラウトキは

とある。(日本書紀(F)日本古典文学大系

虹有りて、天の中央に當りて、日に向へり

「是の日の平旦(午前三時~五時頃)に、

是の記述をみている。

・そして、この地震の記事に引き続き

う。

・阿蘇山が亦は噴火したのである

とある。

「亦地震る」

また

熊本(阿蘇の山)の山を版58阿蘇五岳
 45.2.19(金) ⑤5857 雲を頭に見て73の山をくまらう
 月土記5183 雲が首 ⑤5857 3.761P

下454P 257/622P
 平旦 たいたつ727P
 平旦 よあけ、あさかた

前頁

「大字典」上田万年、講談社「平旦はよあけ・あさかた」参照

の平旦(夜明け時・あさかた)

あるいは、阿蘇山が、午前三時と五時頃、
 代の時計で五時と七時頃、
 て大きな噴火を起した。
 をいて、空高く昇っていった。
 て、天の中央に、庫した時、
 日の出(東に現れた太陽)の方向に向かった下
 という状況と述べている。
 となお、その昔、地(中央)にある

と考えられていたようである。
 肥後国風土記逸文「關宗岳」一条に
 「其の岳の勢たるや、半天に中りて傑峙す
 四の縣を包ねて基を開く。石に觸ひて興る雲
 は、五の岳の最首と爲り、觴を濫べて分る

水は、寔に群の川の巨き源なり。
 々々、諒に人間に有一あり。奇一形は杳々
 けく、伊、天の下に雙なり。
 るか故に中岳と曰ふ。謂はゆる關宗の神宮、
 是なり

阿蘇の五岳、すなわち根子岳・高岳・中岳・烏帽子岳・杵島岳(第四五岳)参照

紀下464⁵ 人定とタの記中か
 紀小436⁵ 準になつていふ。
 紀下464⁵
 天の中央、
 3760-1/2
 2613⁵-1/2
 219⁵

3,762^P

紀下465⁵ 注32
 紀下464⁵ 12行
 紀下234⁵ 5行 注7

ニ

の中岳（つまり、阿蘇の山上神社の神殿とさ
 れる山）から噴出する紅い火柱は、天の中央を
 目指して高く立ち昇つていった。火柱の上端
 部は東の太陽の方に向つていた、というこ
 なのであらう。
 天武紀十三年十月十四日条には、次のよう
 に記されていゐる。
 「この日の夕に、鼓の鳴るような音が東の
 方角に聞えた。そして人定（午後十時ごろ）
 現在の午後十二時ごろか）になつて大地震が
 おこり、国中の男女が叫び、逃げまどつ
 た。山は崩れ、川はわきかえり、諸国の郡
 の庁舎、百姓の家屋、倉庫、寺院、神社の破
 壊されたものは数知れず、人民や家畜も多く
 死傷した。
 このとき、伊豫温泉（道後温泉）が埋もれ
 て出なくなり、土左国では田畑五十余万頃（約
 千二百ヘクタール）が陥没して海となつた。
 古老は、
 「このような地震は、かつてなかったこと

2613⁵-1/2 65

前頁

3760⁵-1/2

紀F464末3行

かんしょう
山將水 (マグマ)
402p
2071p
1421

3,763^{P-1/3}

かんしょう
山將水 9221

だ
と言った
という。
大地震が、西日本一帯に甚大な被害が及んだ。
大地震による惨状について述べているのであろう。
日本書紀の筆者は、古老の弁として、
「このような地震は、かつてなかったこと
だ」
と言わせているほどである。
なお、特に注目されるところは、この地震の
まえぶれとして、
「鼓の鳴るような音が、東の方角に聞え
た」
という点である。
阿蘇山の地中深くに潜む岩漿（マグマ）が
急激にうごめいて、地表に大地震が起ったも
のと思われろ。
↑↑↑↑↑日本書紀には引き続き、
記述されている。
「人有りて曰はく、

こと

④3752 94
地名所
説明

地名所 149 伊豆郡

いづい
出石 地名所 137
「かたわら」
「かたわら」
「かたわら」
「かたわら」

3,763² - 2/3

地名 465 頁33

地名 465 頁33

① 伊豆島の西北、二面、自然に増益せるこ
と、三百餘丈。更一の島と爲れり。則ち、鼓
の音の如くあるは、神の是の島を造る響きな
り。
と、いふ。
とある。
① ここにいう伊豆島は、伊豆の大島
のことであらうか、という。〔日本書紀〕
〔日本古典文学大系、岩波書店、四六五頁、
注三三参照〕
② 一か、
へ筑前国の伊都嶋（出石の島）のこと
を、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
と書き表わしたのではなからうか、
とも思われる。
① 因みに述べると、
旧怡土郡と、旧志摩郡との間に、低地を
作る。此低地はもと海にして、志摩郡（今の
系島半島の地）は眞の島地なりという。
と説示されてゐる。〔帝国地名辞典〕太田島

詳(く)々664P

「について」P 0,303 x 10 x 300
① 3763 1/3 = 909M

50分の地図
「前原」

3,763 P-3/3

「たかろうが」前14行

前2行8字目

前2行8字目

三郎、名著出版

へ糸島郡へ参照

●もしかしたらこの島は、天武朝頃までには九州本土と、一日、陸続きになっていたのかも知れない。

(六八四)

●ところが、天武十三年十月十四日の大地震の際に、

へ「更」(また)へもと通りの口一つの山島に為った

という経緯があったのだろうか。と想像される。

あえてもう少し言えは

へ糸島半島の北端の蒙古山(一五八)が

ら、西北面中央の房山(二三二)を経て、

西端の立石山(二一〇)へと連なっている

る日西北の二面(二つの湾状をなす海

浜部)が、この大地震によって隆起し、日三

百餘丈(約一丈)もの幅で陸地化した

という驚くべき出来事について述べているの

ではなからうか、と思われすが、詳細は分か

らない。(第457)へ糸島地方へ参照

3,764^P - 1/2

- ・カラー
- ・右頁の上半分に大きくはみ出して掲載下さい。



120G

140G

457
第14図 糸島地方

※ 昭和42年3月30日付、国土地理院発行の5万分之1地図「前原」参照

新10(1)-9頁が13図

ものなので
あろうか。

地震 970P

紀下474P

3,764P

2/2

紀下468P

H17.1.23(日) 本が来た。
1.27(木) 本が来た。
1.28(金) 本が来た。
1.30(日) (大阪地区) 朝日新聞

と、不審に思える。

か、古代において認識し得たであろうか。

「その地震がどの方向から伝わってきたものなの

たたとえば、大和国で地震を感じた場合

判断できるものであろうか。

その地震が東西南北のどの方向で発生したのか

地殻の変動による通常の地震を感じた時

というのである。

西より發りて地震する

い記述がある。

天武紀十四年十二月十日条には、更に面白

(六八五)

とある。

天武紀十四年三月、是の月条に、
「灰、信濃國に零り。草木皆枯れぬ」

(六八五)

東北地震を
大坂で感知した

火山地震
地震

元 402
970

事実

(ニ)

「特定」の頁2行

この頁2行

3,765

「あやば」

火山地震

元 402

不可能である。
元 中国の例がある。

トル

鳴動し、大和国にも地震が伝わってきた
という意味にも解し得ることはある。

大和国の都から見て西方にある阿蘇山が

（2）とはいうものの、強いて言えば、

違ふのだという事実を明らかに示す為「西よ

り発りて地震」と表現したのかも知れない

ことは言うまでもない

「その震源地を断定出来る」

えられくる種々の情報によつて、

合であらば、地震の後に朝廷へ伝

地として格別明瞭な場合には、きりきりしている場

阿蘇山や雲仙岳のように、火山地震の震源

日雲仙岳で発生したのであろうか。

地震の震源地を知つて、夫に相違ない。

「西より発りて地震する」

地震の際、震源地の方向の特定することな

ど難しいのではなからうか。

地震計など無かつた時代である。普通の地

紀下475° 同心円¹⁵⁷¹ 甚大¹¹⁵⁷ 震源¹¹⁴⁶ 3.766^P
 などと震源は同心円145°

東南に地震
 三口志(1)-100°

隠々¹⁶⁴ 青龍² 小村⁹⁸

も、同様の記載がある。
 志^い凸^わ明^{めい}帝^{てい}紀^き、青龍二年(二三四)十一月条に
 「都に地震があり、東南の方向から、隠々
 たるどよめきが伝わって来て、屋根瓦を震動
 させたし
 という。
 ・とういてここに、
 「東南の方向から、云々し
 と記されたのかは分らない。東南に震源地が
 あったことを知り得る術があつたのだらうか
 いや、地下の地震発生点(震源)↑↑↑↑↑
 ↑↑↑↑↑の真上の被害が最も甚大であり、
 そこから離れるにつれ同心円状に被害
 害が少なくなつてゆくから、地震計な
 どなくとも地震後に震源地を明確に知るこ
 とが出来るともいえよう。
 とも思われる。
 天武紀末年 朱鳥元年の正月十九日条に、
 「地震るし
 (六八六)

事実の現象

3,767^p

大日本興業
史料研究 57489
資料 → 全部
おらおら
563.1.1d(1) (+)

また理解し難い奇妙な事象についての記述が

記載があるばかりでなく、
一実一実さまさま

このように、日本書紀には、多数の地震の



ならな
いこと
である。

なとと想像する
いうまでもなく定か

の爲の施設が撤廃されたのだろうか

△大倭国(肥後国)に残された観測等

朱鳥元年 (六八六) 末ころ以降の早い時期に

か全く無かつたとは考えにくい

なお、二小以後の持統朝十一年間に、地震

の最後のものかこの記録である。

日本書紀に書き留められた地震記事のうち

と記されて
いる

地震子

条に、

圖 持續 天皇稱制前紀
 の朱鳥元年十一月十七日

とある。

♪うたいがき
あかき

六八六

郷愁 570
崇高 1179

云々 1153
人へ 人向へ

3768
3770
3771

絶妙 1251
「かきかき」

「理解」前頁 17 納得もあかい

● 小等の奇怪な話は、
往古からずと変わることなく、大和国に都
が置かれつづけてきた。と考える場合には、到底説明できない。

● 大和国に相当する大倭国（肥後国）
に、人々の心の故郷と云うべき都があ
ったのであろう。と仮定してみると、こ
とおり、絶妙に、阿蘇山があるいは雲
岳の位置関係と符合する。

米 繰り返して起こる

● 仙岳の激しい噴火および地震の反
は、聖徳太子の構想に沿って、東
の大和国に民を移すのに、はからずも大
きな役割を果たしたように思える。

● 聖徳太子の崇高な理想を実現する
当には、

(1) 大倭国（九州）の古京への郷愁を断ち切り

ひとい 西告い 1875 如何 91

記(馬)140' 記(陸)原又 257 5斤 3,769' 紀上 248' 新

「一」 371' 185' 宗廟 中の帝都 13'

進める必要があつた。
といふ一連の事業をいへば強引にでも、押
につながらる全てのものを廃し去る、
(3) 肥後国に残された真相解明
北端の新しい都日平城宮へ遷し、
(2) 宗廟(祖先をまつる御霊屋)を奈良盆地
の都の方へと向かわせ、
さかけて除々に薄れさせ、人々の心を大和国
へ御肇奉国天皇より御真木の天皇に崇
神天皇)が初めて国の基を築かれてから以降
の、長い長い、輝やかしい歴史を持つこの大
倭国(九州)の山や川や、
置かれてきた大地を、故郷と呼べるに
といふ、
耐えがたく悲しいことであつたらうか。
「それは、あまりにも酷すぎる」
という思いが強かつたに違いない。
阿蘇山や雲仙岳か、ひ

実は 順行

自らの首を切った者もいた。

大地前頁15行

激しい由3768
1457
ひびきき50
3768
1397

大地前頁15行
三代実録前編143P
三代実録前編220P
3753-1/5
363,114(4)

3,770P

二七

三代実録に清和天皇の貞観九年八月六日条に、

つぎりなしに激烈な噴火や地震を繰り返し、
 荒々しく九州地方を揺さぶり続けたから
 に、その支配者達（大宮人達）は、いろいろ
 髪引かゆる思ひはあってもあえて目をつぶり
 心を一つにして、
 「全てを忘れ去るし
 という決意を抱くことが出来たのではな
 ろうか。」
 ＊
 こうして、七〇年、念願がなつてついに
 平城京への遷都が実現した。
 かくして、かつて都が置かれていた後国揺籃の地は、肥後国と
 称され、日本国の西のはずれの片田舎以外の何物
 でもないようになつた。
 なお、その後も阿蘇山の地震は続いた。
 前記のとおり、貞観六年（八六四）十月三
 日に「阿蘇山が鳴動し、布のようなものが延
 綿した」という。（「三代実録」清和天皇の
 貞観六年十二月二十六日条参照）
 また、貞観九年（八六七）五月十一日の夜から十
 二日にかけても異変があつた。

大神神社 147^P

「他方」③ 3769⁵ 5^行

3,771^P - 1/2

大カマ 1972^P 小カマ 166^P
奇奥 漢 光 照
ギキ クワウ

③ 3753^P - 3/2 三代実録 前編 220^P
セウ 20^行 大カマ 1426^P 3^行 へ

略に、
一条天皇の長保二年(一〇〇〇)六月十六日、
一方、大和国の大神神社についで、日本紀
磐龍命神。正四位下姫神所居山嶺。去五月十
一日夜奇光照耀。十二日朝震動乃(山)崩。廣五
十許丈。長二百五十許丈。
とある。三代実録、清和天皇の貞観九年
八月六日条参(※) (あは) 國史大系、日本三代實
録、前篇、吉川弘文館、二二〇頁へ注記参照
*

H30(2018)9.27(木) ~ 9.28(金)

IF

H52.20(土)⑤

↑

3,771^P-2/2

なつ
懐か 1660^P

S63.1.15(金)⑤

いんづか2194^P
いときこ117
別冊

御ト。依大神社鳴動也。七月十三日奉幣二十
一社。依大神社宝殿鳴動也。中山和敬、学生社、一
とある。(「大神神社」中山和敬、学生社、一
四七頁参照)
・大神神社が鳴動し、大神神社の宝殿が鳴動
した時、一人々は、西方のあの日神山に
(阿蘇山)のこを、懐かしく、思い起した
のではないだろうか。

*

944
とうい
湯治 1568
3,772 - 1/4

を折る 335
竹取物語 (古色) 33, 35
" (青毛) 7P, 9P

タイHは
「蓬萊の島」
↓ 4012

竹取物語 (東海海中の蓬萊山)

↑↑↑↑ 竹取物語には、こんなことが記

されてゐる。熱心に求婚する

かぐや姫は、五人の男達のうちの一人、車

持皇子に、貴公子

「くらもちの皇子には、東海に蓬萊といふ

山あるなり。それに銀を根とし、金を茎とし

白き玉を実として立てる木あり。それ一枚折

りて給はらん

と言った。

すると思慮の深い車持皇子は、公儀には

「筑紫の国へ湯治に行きたいと存じます」

と願ひ出て、暇をちようだいした。

↑↑↑↑ 一方、車持皇子は、かぐや姫の家

へ使いの者を遣ひし

「これから、玉の枝を取りにでかけます」

と言わせた。

だが下車持皇子は、難波から筑紫国に

をさして下向するふりをし、三日はかり

後に、そつと帰つてきた。

そして車持皇子は、こっそり工匠達に玉の枝を作ら

せた、という。

はいかん
請願

あはから

おちろん
勿論

ふそ

扶桑

ほうらい

蓬萊

2025

3,772 P-3/4 ⑤ 3726

見なす

3776
12行

申し出て 前13行



こう解釈してみたい。

・車持皇子からの熱烈な求婚を拒む為「かぐ

や姫は止むを得ず

「東海の（伝説上の）蓬萊山へ行って

玉の枝を取って来てくださいし

と無理難題を申し出た。

・なるほど、中国の伝説によれば「蓬萊山は

東海の海中にある神山だ」と言われている。

・「かすでに述べたとおり、往古には、

「蓬萊山は、阿蘇山のことである」（第七十一章

とも見做されていたようである）（第

入蘇迷廬の山（須彌山）の項において既述

・そこで、思慮の深い車持皇子は、

「かぐや姫がいう「蓬萊山」は、仙人が住

むという東海の霊山のことだ」とはいえ、

「中国の東海海中に浮ぶ扶桑の島（日本国）

にある火山「阿蘇山」の別称だと解いても、

決して誤りではない✓

と考えたのだろう。

・ここに、車持皇子は、公儀には、

「筑紫の国へ湯治にまいります」と

と言つて、暇をもらい、一方かぐや姫の家の方

すにか
ら
助
3772-3/4

すんぶん(すんぶん)
すんぶん
竹取物語
前巻(前)9?

かくれか
隠家
390°
こと

決り
11行

かい
解にも 前頁16行
理解 二の頁16行

には、

「蓬萊山へ玉の枝を取りにでかけます」

と言、難波から筑紫国へ下向するふりをし

たように思われぬ。

・いかりながら、蓬萊山(つまり阿蘇山)へ

行ってみたところで、勿論玉の枝が見つかる筈などない。

・それはあまりにも分り切ったことである。

・車持皇子は、三日ほど後に難波へ帰り、叡

重な隠家に六人の工匠たちを入れ、姫が注文

したのと寸分違わない玉の枝を作らせた、と

いう話の筋書きになっているのだらうと思わ

れる。

ともあれ

当時の人々は

へ当時の人々は皆「阿蘇山」を「蓬萊山

(須彌山)に見たてて理解していた。

ように見受けられる。

■そうした背景があったから、竹取物語の作

者は、くどくどとは述べなかつたのであろう。

と思われぬ。

H30(2018)9.29(土)~9.30(4回)
 H31(2019)3.31(日)~4.1(3回)
 令和元(2019)9.10(火)~9.11(3回)
 令和2(2020)4.23(木)~4.26(4回)
 令和3(2021)1.25(日)~2.16(4回)

3.772^p-4/4

142021062
 趣向 おもむき 一方
 3172
 3/4末

3/16 15
 1/26

いたのではなからうか
 部の趣向を読みとって、おもろく感じ
 他方々読者は、書きさすていな
 11部

*